

小児看護学実習での発達外来実習の学び

糸井志津乃 上松恵子

(Shizuno ITOI Keiko UEMATSU)

【要約】

今回、小児看護学で実施した発達外来の見学実習での学生の学びを明らかにし、実習指導の検討資料とする目的で、学生の記録を分析した。結論として、以下5点があげられた。1) 学生は「患児および家族の理解」「外来の看護の実際」について興味を抱いていた。2) 学生は子どもの実際の発達だけでなく家族の発言から子どもの自宅での成長発達状況を理解していた。3) 看護師が短時間で、継続看護に向けてさまざまな方法で患児および家族の情報を獲得していることを理解していた。4) 発達外来での見学実習は、継続看護の視点においても適切な実習になることが示唆された。5) 病棟実習では、受け持つことが少ない事例に外来では出会うことができおり、今後、事前学習の充実を図り、外来での学びをより深めるための対策を得る必要性が示唆された。

キーワード：小児看護学、発達外来、看護実習、学生の学習内容、大学生

1. はじめに

小児看護学実習は、近年の少子化や小児科医の減少等によって、実習施設の確保が困難な状況にある。実習施設の確保ができて一般病院の小児病棟では、入院患児の重症化や入院期間の短縮化も影響し、学生が受け持つケースの制約も発生している。本学においても場合によっては、患児1名に対して、学生2名で受け持ち、2名で役割分担しながら実習を展開することもある。

また、現代の看護学生は、日常生活上子どもと関わる機会が少ない。そのため、学生が子どものニーズを理解しケアを実施する小児看護学実習では、子どもの欲求がわからない、関係の築き方に戸惑うといった状況が報告されている¹⁾。短期間の実習では、看護の対象の理解や援助方法を理解できるための看護展開の実施がますます困難な状況である。

著者らの昨年の研究では、事前学習や指導者の早期の介入によっては、短期間でも効果的な実習が展開できることが明らかとなったが、継続看護といった視点での学びには困難がみられた²⁾。

今回、実習施設の協力もあり、発達外来で継続看護について学ぶ機会があった。発達外来の目的は、①家族が子どもの発達の特徴や段階を捉えられるようになること ②家族が子どもの発達に合った関わりができるようになること ③家族が子どもの発達に合わせた環境づくりができるようになることである。つまり、発達外来では、家族が主体となって子どもの発達に関われるように援助することである。

そこで、本研究の目的は、発達外来の場で、学生が外来看護師の活動を見学することによって、どのような学習内容に注目し、学びとしてとらえられているのかを明らかにする。さらに、今後の実習の方向性を検討する。

2. 目的

小児看護学で実施した発達外来の見学実習での学生の学びを明らかにし、実習指導の検討資料とする

3. 研究方法

1) 期間

2012年5月～7月

2) 分析対象

春学期での外来実習で発達外来を見学した学生のうち、研究の許可が得られた3年生の23名の記録内容である。

3) 分析方法

分析は以下の手順で行った。

①学生が記載した外来実習の目標と内容を精読し、学生が関心のある学びの目標と学習内容を読み取り類似のものをまとめてサブカテゴリー化した。②サブカテゴリーの意味が共通しているものを合わせて抽象度を上げてカテゴリー化した。

4) 倫理的配慮

実習終了後、学生に研究目的、プライバシーの保護、成績には影響のないことなどを口頭・説明書で説明し同意書への署名により研究参加の承諾を得た。

5) 用語の定義

発達外来：子どもの言語・認知・社会性・運動発達の遅れの状態・原因をつきとめ、治療の検討および他施設への紹介を行っている外来。

6) 外来実習の概要と実習形態

小児看護学実習では、健康な子どもを対象に保育園実習を2年次に実施し、一般的な子どもの発達を理解した上で健康障害をもつ子どものケアを理解する病院での実習を3年次に行っている。

外来実習は健康障害をもつ子どもを対象とした実習に位置づけており、以下の実習目的・目標の中に組み入れている。

〈実習目的・目標〉

目的：

乳幼児・学童・思春期にある病児（以下、小児とする）の健康障害を理解し、家族を含めた総合的視点から小児の権利を尊重した看護を展開する基礎的能力を養う。

目標：

(1) 小児を成長・発達、家族関係を含めた総合的視点

から捉えられる。

- (2) 小児を一人の個として尊重し、その特性を理解し家族を含めた適切な援助方法を理解する。
- (3) 小児とその家族や保健医療チームとの相互作用を通して、自己理解を深め自己の課題を明確にする。
- (4) 小児とその家族を取り巻く医療、保健、福祉、教育の連携の中で、小児看護の役割を理解する。

〈発達外来での学習目標〉

小児看護学実習の目標を参考にし、学生が興味・関心のあることを中心に学習目標を立案している。

〈実習方法〉

5～6名を1グループとし病棟実習5日間のうち、半日を一般外来、専門外来、保健外来に見学実習として配置している。配置については、実習期間中、予約状況が多い外来を主に計画している。

外来実習の学生配置は、病棟での受け持ち患児の実習をできるだけ中断させないように、受け持ち患児の状態や家族の付き添い状況、学生の学習状況を踏まえて計画している。

外来実習では、外来の実習指導者に指導を依頼し、半期ごとに実習開始前と終了後に実施している。外来実習は開始したばかりであるため、次年度に向けて指導方法や見学内容など検討しながら実施している。

実習記録は、外来実習用の用紙を準備し、学生の学習目標（行動目標）と学習内容、気づいた内容・考察を記載するよう事前に大学でオリエンテーションを行っている。

今回の研究では、学生数が多く実施できた発達外来実習を取り上げた。

4. 結果

「 」はカテゴリー、『 』はサブカテゴリー、〈 〉はその具体的内容を要約しコード化した内容である。

1) 学生の発達外来での学習目標（表1）

学生の学習目標の記述内容を分析した結果、35記述が抽出され、「患児および家族の理解」「外来看護の実際を知る」の2つのカテゴリーと6サブカテゴリーで構成されていた。

「患児および家族の理解」では、『患児の成長発達の理解』『患児および家族のニーズ』であり小児看護学実習の目標1－（看護の対象理解）にあたる部分である。

「外来看護の実際」では、『患児および家族のニーズ

表1 発達外来 学生の学習目標

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
患児および家族の理解	患児の成長発達の理解	発達外来の見学を通して年齢や疾患による成長発達の違いについて学ぶ。
		問診・診察・発育評価等の検査の見学を通して発達段階や課題が理解できる。
		小児の発達段階を認知、運動、言語理解など様々な視点から判断する方法を学ぶ。
		発達に伴う小児の反応や行動の特徴を知り、健康障害における発達の影響を理解する。
		外来を受診する患児の発達の状態を発達段階をもとに比較しアセスメントする。
	患児および家族のニーズ	どのような人々がどのような理由で来院しているのかを理解する。 発達外来を受診される患児や家族のニーズについて理解する。
外来での看護の実際	患児および家族のニーズに合わせた関わり	患児の疾患を意識してコミュニケーションをとる。
		患児に対してどのような診察や看護をしているか、声かけなどを見学し自分自身でもどのような対応が良いかを考察する。
		問診・診察・医療処置・検査等の見学や介助を通し、外来看護の役割や患児、家族との関わり方を学び、小児疾患の理解を深めていく。
		年齢別の発達・異常、患児とその家族との関わりを学ぶことができる。
		患児やご家族の方とのコミュニケーションをとる際にどのようなことを意識しているのか理解する。
		患児の様子だけでなく家族の表情や言葉を観察し、看護師の関わりを学ぶ。
		年齢ごとの発達段階に基づき発達外来を受診する児の成長・発達の状況やそれに対する看護の支援の必要性を学ぶ。
		保健指導をどのように行なっているのか、態度や言葉遣い、姿勢などに注目しながら見学をする。
	外来看護師の役割	外来看護師がどのような看護を提供しているのか学ぶ。
		問診・診察等での看護師の役割・機能が理解できる。
		看護師の医師、家族、患児への働きかけなどを観察し、外来看護師の役割を理解する。
		外来看護師はどのように患児・家族と接し、看護をしているかを知る。
	外来の役割	問診・診察・医療処置・検査等の見学や介助を通し、外来看護の役割や患児、家族との関わり方を学び、小児疾患の理解を深めていく。
		外来の役割と位置づけ、病棟との違いを理解する。
		病院と地域の中間にある外来の役割を知る。
	他職種との連携	家族が医師や看護師に対して、どのような訴えをしているのか把握し発達外来の役割を理解する。
		発達外来での他職種との連携を理解する。 外来看護を見学し、スタッフが医師や家族にどのように関わり対応しているか見学し学ぶ。

にあわせた関わり』『外来看護師の役割』『外来の役割』『他職種との連携』であり、小児看護学実習の目標2・4 - (援助方法の理解) (連携) (小児看護の役割) にあたる部分である。

特に継続看護に関する言葉は使用しておらず、この段階では、学生があまり意識していなかったことが明らかである。

2) 学生の発達外来での学習内容 (表2)

学生の学習内容の記述を分析した結果、120の記述があり、「患児および家族の理解」「継続看護に向けて

の外来看護の実際」「自己の振り返り」の3つのカテゴリーと8つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生が事前に立案した学習目標とくらべると「自己の振り返り」のカテゴリーと2つのサブカテゴリーが追加されていた。

① 患児および家族の理解

このカテゴリーは、学生が外来の看護師の活動を見学していく中で、学生自身が患児および家族について気づいた内容を示したものである。

『患児の成長発達の理解』(患児の個々の成長発達の状況を知る) (患児の成長に対する家族の理解度を

表2 学生の発達外来での学びの内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
患児および家族の理解	患児の成長発達の理解	患児の個々の成長発達の状況を知る
		患児の成長に対する家族の理解度を知る
	患児および家族のニーズ	家族の外来受診時の思いを知る
継続看護にむけての外来看護の実際	患児および家族のニーズを把握	医師による説明内容を把握する
		患児に合わせた関わりと発達状況の観察を行う
		両親から子どもの発達状況の理解度を聴取する
		成育環境を両親や子どもとの関わりから確認する
	患児および家族のニーズに合わせた関わり	患児の恐怖感を緩和する雰囲気の設定を行う
		発達状況を踏まえて家族への養育アドバイスを行う
		家族の不安を聴き、個人差を踏まえたフォローを行う
	外来看護の特徴	家族の気持ちを察し丁寧な対応を行う
		短時間でアセスメントとケアを行う必要がある
		地域サポートの紹介を行う
他職種との連携	外来診療の環境を設定する	
	医師・理学療法士・検査技師・事務等の病院スタッフとの連携	
自己の振り返り	知識面での課題	疾患と発達の関連を理解するために疾患の知識を深める
		発達アセスメントを正確に行うための知識を深める
	技術面での課題	家族への情報収集や説明のためのコミュニケーションスキルアップを心がける

知る)、『患児および家族のニーズ』〈家族の外来受診時の思いを知る〉といった内容であった。

② 継続看護に向けての外来看護の実際

このカテゴリーは、外来看護師が実施している活動を観察し、継続看護にむけての役割について気づいた内容を示したものである。

『患児および家族のニーズを把握』〈医師による説明内容を把握する〉〈患児に合わせた関わりと発達状況の観察を行う〉〈両親から子どもの発達状況の理解度を聴取する〉〈成育環境を両親や子どもとの関わりから確認する〉、「患児および家族のニーズに合わせた関わり」〈患児の恐怖感を緩和する雰囲気の設定を行う〉〈発達状況を踏まえて家族への養育アドバイスを行う〉〈家族の不安を聴き、個人差を踏まえたフォローを行う〉〈家族の気持ちを察し丁寧な対応を行う〉、『外来看護の特徴』〈短時間でアセスメントとケアを行う必要がある〉〈地域サポートの紹介を行う〉〈外来診療の環境を設定する〉、「他職種との連携」〈医師・理学療法士・検査技師・事務等の病院スタッフとの連携〉といった内容であった。

③ 自己の振り返り

このカテゴリーは、外来看護師の活動を見学する中で学生自身が今後の課題の内容を示したものである。

『知識面での課題』〈疾患と発達の関連を理解するために疾患の知識を深める〉〈発達アセスメントを正確に行うための知識を深める〉『技術面での課題』〈家族への情報収集や説明のためのコミュニケーションのスキルアップを心がける〉といった内容であった。

5. 考察

1) 学生が立案した学習目標

学生が立案した学習目標は、「患児および家族の理解」「外来の看護の実際」について興味を抱いていた。この内容は、小児看護学での対象理解、援助方法の理解や他職種との連携、小児看護の役割についての内容であった。

この中においては継続看護といった文言は使用されおらず、対象理解のための対策や、看護師がどのような活動を行われているのかといった視点で述べられていた。

今回、オリエンテーションでは「継続看護」といった単語は提示せず、学生の興味関心の視点で立案する旨を伝えた。学生は、実習の目的目標と学生自身の興味関心の視点から立案していた。学生の視点だけでは、病棟での差し迫った自分の計画で精一杯であり、継続看護といった観点から目標設定できていなかった。

そのため、オリエンテーションなどで、外来で学べそうな継続看護の内容の枠組みを説明するといった準備によって、より学生の視点が定まり学びが深まる可能性がある。

2) 患児および家族の理解に努める

学生は実際の子どもの発達だけでなく家族の発言から子どもの自宅での成長発達状況を理解していた。

外来での学生は、看護師が子どもと遊びの中で発語や指の動き、理解力など具体的な発達状況を観察している光景と一緒に参加し、さらに、医師の診療場面も見学している。そのため、家族の自宅での状況や家族の不安な内容など具体的に聴くことができている。学習目標の視点をもって観察している様子がみられた。

学生が直接、家族などにかかわることができるのが到達目標としては理想ではあるが、家族のニーズがアセスメントできていない学生にとっては、最初から関わることは困難である。さらに、小児外来では、さまざまな症状の小児および家族が来院しており、必要な情報を引き出す高いコミュニケーション能力が求められる³⁾。子どもへの接触体験が少ない学生にとっては、育児に対してすらも家族がどのような内容で不安を抱くのか、どういったことに困っているのかといったことも未経験である。

そのため、まずは、看護師の行動を観察することによって、どのような視点で対象理解をしているのか、について知ることが学びの一步と考える。

3) 継続看護にむけての外来看護の実際を知る

学生は、外来看護の特徴である看護師が短時間で対象理解を行うことを実感していた。看護師が短時間で、医師の説明内容を把握し、家族と話をし、さらに患児と遊びながら発達状況を把握するなど、さまざまな手段をとって情報を獲得していることを理解していた。

また、発達に対しての不安などのある家族に対して

具体的な養育アドバイスや、気持ちを察した丁寧な対応、地域でのサポートの紹介など、具体的な指導場面に立ち合わせていただいている。さまざまな家庭の状況を知り、個々の患児および家族のニーズに合わせて各家庭が地域で生活していくための情報提供も実施しており、継続性のある外来看護師の役割についても学べていた。

オリエンテーションでは特に、看護の継続性について説明をしていなかったが、実際に行っている援助が家庭での援助内容であるため、おのずと学生は気づいていた。発達外来での見学実習は、継続看護での視点での学習には適切であることが示唆された。

4) 自己の振り返り

自己の振り返りにおいては、学生は知識と技術の向上を課題としていた。

発達外来では、発達障害に影響する疾患をもつ児が多く受診し、看護師は短時間の間に、患児および家族のニーズに合わせた対応をしなければならない。発達についても実際に遊びを通して、また、家族に日頃の様子のお話を聴きながら発達面でのアセスメントを行わなければならない。疾患と発達について十分に理解した上で、患児を観察しなければアセスメントの視点が会得されない。

しかし、学生は机上で学習をしても、知識を使用する経験がないと知識としての定着が得られない。今回の外来実習において、学生は知識の少なさと定着のなさについて実感していた。外来での多くの事例との出会いは、学生の問題意識を向上させ、次への学習の契機になったと思われる。

病棟実習では、受け持つことが少ない事例を外来では会えることができおり、今後、事前学習の充実を図り、外来での学びをより深めるための対策を得る必要があると考える。

今回の結果からは、学生が直接家族と関わる機会がなくても、外来での看護師の活動を見学させていただくだけで、多くの小児や家族との出会いがあったことが明らかになった。そして、間接的に観察および得られた情報から、対象理解およびニーズに合わせたケアの必要性を学べていた。大見らは⁴⁾、従来の一介を受け持つ病棟中心の学習方法には限界があるのではないかと指摘している。昨年度の著者らの研究でも、短期

間での実習で継続看護についての学びが得られにくい結果があり、今後、外来実習での充実を得ることによって、より学びの深まりが得られることが示唆された。

6. 結論

今回、小児看護学で実施した発達外来の見学実習での学生の学びを明らかにした。

- (1) 学生は「患児および家族の理解」「外来の看護の実際」について興味を抱き目標をあげていた。
- (2) 学生は子どもの実際の発達だけでなく家族の発言から子どもの自宅での成長発達状況を理解していた。
- (3) 学生は看護師が短時間で、継続看護に向けてさまざまな方法で患児および家族の情報を獲得していることを理解していた。
- (4) 発達外来での見学実習は、継続看護の視点においても適切な実習になることが示唆された。
- (5) 病棟実習では、受け持つことが少ない事例を外来では出会うことができおり、今後、事前学習の充実を図り、外来での学びをより深めるための対策を得る必要性が示唆された。

【引用文献】

- 1) 笠井由美子, 小野敏子, 木村紀子: 小児看護学実習における学生の戸惑いに対する対処行動と対処行動を可能にする要因. 日本小児看護学会 第20回学術集会講演集 236 (2011)
- 2) 糸井志津乃, 恩澤美恵子, 上松恵子: 小児看護学実習で急性疾患を受け持った学生の学びの視点. 目白大学健康科学研究 5 67-72 (2011)
- 3) 近藤美和子: 小児の外来看護に必要なコミュニケーションスキル—家族への対応. 小児看護 33 (10) 1368-1378 (2010)
- 4) 大見サキエ, 片川智子, 宮城嶋恭子, 金城やす子: 小児看護学領域における外来看護についての大学教育の現状. 看護研究, 40 (4) 383-390 (2007)

【参考文献】

- 長谷川桂子, 石井康子: 小児科外来実習からの学生の学び. 岐阜県立看護大学紀要 8 (1) 11-18 (2007)
- 平本泉, 長谷部真木子, 野村誠子, 石井範子: 小児看護学実習における外来実習の効果—外来実習導入前後の経験状況の比較—. 秋田大学医療技術短期大学部紀要 7 33-40 (1999)
- 石井由美, 及川郁子: 小児看護学における外来実習について—外来実習の変遷と本学学生の実習の学びから—. 聖路加看護大学紀要 27 96-163 (1996)
- 宮谷恵, 小出扶美子, 山本智子, 市江和子, 高 真喜, 新村君枝: 看護基礎教育の小児看護学実習における外来単独での病院実習の有用性の検討 19 (2) 25-31 (2001)

(2012年10月9日受付、2012年11月17日受理)